

インホ-ナ-ション サ-キュラ- No. 8

1971年3月

内 容

I	役員選挙の結果	1
II	第4回大会案内	3
III	和文誌委員会報告	8

日 本 発 生 生 物 学 会

京都市左京区北白川追分町
京都大学理学部植物学教室内 (606)

本号の第4回大会についての案内は、大会時迄必要な内容を含んでおりますので、今後のサーキュラーに載せられるだろう大会関係の情報とともに、しばらくの間保存下さい。部数は会員数ギリギリしか作成しておりませんので、新入会員以外の方からは、お申し出があっても再度おとどけ出来ません。

寄稿欄をもうけましたが、サーキュラー№7を御参照の上、どしどし御寄稿下さい。

事務局

I 役員選挙の結果について

総会での諒承にもとづき、第2回の会長および運営委員の選挙を行いました。その結果は下記のとおりであります。

1971年2月15日

第2回会長・運営委員選挙管理委員会
(委員長・川上 泉)

会 長 選 挙 (投票総数112, 有効投票112)

当 選 団 勝 磨 (東京都立大学)

次 点 岡 田 節 人

運営委員選挙 (投票総数111, 有効投票105)

(定員 14名)

当選 岡 田 節 人 (京大・理・生物物理)

林 雄次郎 (東京教育大・理・動)

江 上 信 雄 (東大・理・動)

相 山 正 雄 (名大・理・生)

金 谷 晴 夫 (東大・海洋研)

川 上 泉 (九大・理・生)

江 口 吾 郎 (京大・理・生物物理)

山名 清隆 (九大・理・生)
竹内 郁夫 (京大・理・植)
古谷 雅樹 (東大・理・植)
飯野 徹夫 (遺伝研)
黒田 行昭 (")
天野 実 (国立がんセンター研)
大西 英爾 (名大・理・生)

次点 石崎 宏 矩

事務局から

御存知のように去る2月15日役員選挙が行なわれましたが、役員任期等について説明申し上げます。第1回の選挙は、本学会の設立総会(1968年5月於立教大学)での諒承に基いて、同年の8月に行なわれ、9月に最初の運営委員会が東京で持たれました。会則によって任期が2年になっておりますので、本来なら昨年8月に任期切れになっているわけです。役員が任期8月或は9月にスタートしますと、会則上会計年度は4月から始まることになっており、2年の役員任期の最初の一年は、前期の役員が立案したことを実行するだけになります。したがってこの点を調節するのに次の二つの考え方が出ました。第1に、第1回目の役員選出は8月ではあっても学会設立は5月末でしたからその時点にさかのぼって任期を考えるなら、ついでに2ヶ月さかのぼって昨年の3月中に第2回目の選挙を実施する。つまり第1回目選出の役員に限って任期を短縮するという考え方です。第2の考え方は、8月選出だから少し任期を延長して昨年一杯ということにすれば、新年には新役員会が構成出来、次年度の予算やその他の計画が出来るというものでした。

この両方の考え方について一昨年金沢での第2回大会時の役員会で検討されました。その時点ではいわゆる大学粉争が各地ではげしくなり、はたして、第1の考え方によって選挙が実施できるかどうか疑問がありました。(例えば、会員の所属機関住所ではなく、自宅宛連絡のために、住所の再調査がどの程度可能かなど、……第1回目の選挙では、あとで判ったことですが東京教育大学のかなり

の方が、選挙施行日に間に合うよう郵便物を受けとれなかったという実例がありました)そこで、第2の考え方を採ることになり、総会で幹事長および庶務幹事から説明させて載き諒承を得ました。さらに昨年3月の神戸での第3回大会時の総会でも再度諒承を得た次第です。本来なら昨年中に選挙を済ますべきでしたが、もっぱら現庶務幹事の手落ちで、年を越してしまい、各方面に御迷惑をおかけしてしまいました。

役員任期の点について 設立総会時に御甚力載いた立教大学の織田教授から疑問および注意がよせられました。サーキュラーで十分に説明すべき事と存じ、ここに、おわびとともに総会に出席されなかった方々への説明といたします。

(庶務幹事記)

II 日本発生生物学会第四回総会ならびに大会の御案内

第四回総会および大会を下記の要領で行なう準備をすすめています。できるだけ沢山の方々のご参加をいただき、大会が有意義なものになるより期待しています。

大会準備委員長

川 上 泉

812 福岡市大字箱崎

九州大学理学部生物学教室

TEL 092 (64) 1101 内線4164

(連絡先 山名清隆 内線4190)

A 総会ならびに大会要領

- 1) 期 日 昭和46年8月25日(水)・26日(木)
- 2) 会 場 九州大学理学部

3) 日 程 (予 定)

	午 前	午 后	夜
第1日(25日)	一 般 講 演	総会, 一般講演	懇 親 会
第2日(26日)	一 般 講 演	特 別 講 演	

B 参加ならびに講演の申し込み

1) 参加希望者は別紙添付の参加申込票に必要事項を,宛名票の一枚に住所・氏名をご記入の上,大会参加費1,000円,懇親会に出席の方は別に1,500円を添えて5月10日までにてお申込み下さい。(到着期日厳守)。送金には定額小為替を利用し,「福岡市箱崎九大理学部 川上 泉」を指定受取人にして下さい。(指定受取人の住所氏名は上記のとおりにご記入下さい。)これらのものをお送りいただくときには,別紙添付の宛名票(準備委員会宛のもの)をお使い下さい。当方の郵便物の整理上必要ですから,どうかご協力下さい。

2) 大会には参加しないが,講演要旨をご希望の方は6月20日まで宛名票(住所および氏名をご記入下さい)とともに500円を定額小為替で上記の方法にしたがってお送り下さい。

3-a) 講演希望者は参加申込票,大会参加費のほかに講演申込票および宛名票2枚(住所および氏名をご記入下さい)を5月10日までに到着するようお送り下さい(締切日以後のものは原則として受けません)。

講演希望の方には,講演要旨をお書きいただく原稿用紙を5月末までにお送りします。講演要旨をご記入の上,6月20日まで(必着)にお送り下さい(このときにも添付された準備委員会宛の宛名票をお使い下さい)。

原稿用紙は1,600字詰(予定)ですが,図や表を記入できます。お送りいただいた原稿をそのまま写真印刷にいたします。

3-b) 大会を有意義にするため,限られた大会期間の中で,できるだけ十分な講演時間をとりたいと考えております。そのために,お送りいただいた講演要旨を検討し,大会準備委員会の判断でご講演を来年以降に延期していただくようお願いすることもあります。この点をご承知おき下さい。なお,同じ主旨から講演は1人1題とします(共同研究の場合はこの限りではありません)。

3-c) 講演時間は討論を含めて1題20分の予定です。会場には35ミリ・スライド映写機を一台用意します。おのおののスライドには右記のような事項を記入して下さい。なお、同一のスライドを2度以上使用したいときは、御面倒でも必要な枚数をご準備下さい。

No.1 (スライド番号)	
氏名	
〒 〇〇〇	
〇〇 〇〇	
氏名	
講演番号	

C 集会の申し込みについて

今年はシンポジウム形式のものは行ないません。かわりに4題くらいの特別講演(各45分位)を企画しております。

個人的にシンポジウムなどの企画をなさる方で小さい部屋が必要な場合には、早目に準備委員会へお申し出下さい。

D 宿泊について

準備委員会としてはお世話いたしかねますので、お手数ながら各自で予約して下さい。ご参考までに下記の旅館、ホテルをえらび、宿泊料、交通費のおおまかな金額をあげておきます。

宿 舎 名	所 在 地	TEL	宿 泊 に つ い て	
			宿 泊 料	備 考
飛 梅 荘 (国家公務員共済組合)	今泉二丁目4番 65号	74-6258	朝・夕食つき 1,300円	予約金200円/泊 3ヶ月前より申 込受付
那 の 津 荘 (地方公務員共済組合)	草香江二丁目1.1番 28号	75-2928	朝・夕食つき 1,500円	予約金500円/1泊 なるべく早く申 込みを, 今すぐでも可
福岡旅行センター	馬出浜松原950	65-8967	朝・夕食つき 2,500円	個人申込みでは 予約金1,000円/ 1泊 10畳に5名宛
西鉄 グランドホテル	大名二丁目6番60号	77-7171	S 3,000~4,000円 T 5,000~5,500円 W 6,000円 和 7,000~8,000円	
博多東急ホテル	天神1-16-1	78-7111	S 2,900~3,500円 T 4,500~6,000円 W 5,000~7,000円	
ホテルステーションプラザ	博多駅前二丁目1番	43-1211	S 2,300~3,000円 T 4,200~6,000円 W 5,000円 和 5,500円	
ホテルニューハカタ	三社町25番 博多ステーション	43-1111	S 2,500~3,500円 T 5,200円 W 5,000円	

備考

- S=シングルベッドルーム T=トウィンベッドルーム W=ダブルベッ
- タクシー料金は大きな金額ですので御了承下さい。

交 通 案 内			
博 多 駅 よ り		九 大 へ は	
西 鉄 電 車	タクシー	西 鉄 電 車	タクシー
城南線經由⑧姪の浜⑩室見橋又は西新町行きに乗車し薬院大通り下車，徒歩5分	170円	⑫貝塚行きに乗車し，九大中門下車，所要時間 40分	400円
同 上 大濠下車，50米逆もどり	300円	同 上 所要時間50分	470円
⑩貝塚行きに乗車し箱崎浜下車，電停横	250円	⑤⑩⑫貝塚行きに乗車し，九大中門下車 所要時間 10分	130円
⑧貫線經由西新又は室見橋行きに乗車し，グランドホテル前下車	150円 板付より 400円	⑤貝塚行きに乗車し，九大中門下車，所要時間 35分	270円
同 上 県庁前下車，すぐ	130円 板付より 370円	同 上 所要時間25分	250円
徒歩2分	板付より 300円	⑬貝塚行行に乗車し，九大中門下車，所要時間 25分	270円
博多駅階上	板付より 300円	同 上	270円

ドールム 和=和 室

Ⅲ 和文誌編集委員会からの報告

。 発牛生物学会編として定期的に刊行する発牛生物学関係の単行本として、先に“発牛における制御”の発行を行なった。引きつづき、1970年度の大会にて紹介した通り、“初期発牛における細胞（仮題）”を計画したが、執筆者の御協力により予定通り編集を終り、すでに印刷の段階に入っている。なお、委員会としては団 勝磨、金谷晴夫両氏に企画、編集につき一方ならぬ御尽力をお願いした。第3回の企画としては、“加齢 Aging”の問題を取上げることとし、企画については、江上信雄（東大・理・動物）、山田正篤（東大・薬）両氏に御協力を依頼し、1972年春頃の発刊を計画している。第4回目以降の企画について、会員諸氏からの御意見を特に希望している。

。「発牛生物学誌」1970年度の発刊が、原稿の集りがおくれたこともあって、大へんおそくなったが、1971年1月に発刊され、会員諸氏に配布された。

。 発牛生物学会の発足当初から、和文の学会誌の発行については種々の意見があった。運営委員会においても、会員個人から寄せられた声の中にもこの際、和文学会誌の発行を止めてはどうか、というものもあり、和文誌編集委員会はその方針の検討もゆだねられてきた。過去2年間の委員会の方針は、すでに総会、委員会でその都度報告し、諒承された通りであるが、改めて繰返すと次のようになる。

i) 発牛生物学に関する関心は、近時極めて広い範囲から寄せられているので、学会としては、現在の発牛関係の問題についての総説的な刊行物をその要求に対応するよりな形で発行して行く。

ii) 和文誌購読のみを希望される会員もかなりあり、会員に和文による発表の場を提供することは会の活動として重要なことであるので、誌上参加も認める形で、学会大会の報告を学会誌として定期的に刊行する。

以上のような方針で、2年間を過してきたが、委員会では最近、改めてこの問題を慎重に討議した。その内容は、今後の発牛生物学会の活動において「和文学会誌」としてはどのような内容がふさわしいか、「学会誌」の形をとったものの刊行が真に必要なのか、という点についてであって、多方面から詳細に論議した。論議の内容を要約すれば次の通りになる。

Ⅰ) 和文の学会誌が欧文のそれと併行されるとすると、その内容としては、原著論文よりも、総合的レビューを主としたものが望ましい。しかし、発生物学関係の問題のレビューは単に会員に止まらず広くから期待されているのであって、むしろ、「学会誌」の形式をとらないで、秀れたものの刊行を企画することに、本学会としての活動の責任があるのではないか。

この目的として、現在、本学会が編集している単行本の持続的な刊行に力を注ぐべきである。

Ⅱ) 会員の自由な発表の場として、現在の学会誌のような形式は、ある役割をもっている。しかし、現在の実状で会員の多くが関心を寄せられているのは「発生物学誌」に発表することよりは学会大会で発表することの方にあると判断せざるをえない。なぜなら、今まで誌上自由参加は皆無であり（大会欠席者の誌上発表はあったが）、大会発表希望者の増加があるにも拘らず、発表されたものの「発生物学誌」への原稿の提出は停滞していることが多い。従って、「学会誌」としてよりは、かなりまとまった「大会報告の予報録」として、同じ内容のものを刊行することの方がはるかに実質的な措置であると考えざるをえない。

Ⅲ) 会員の連帯の一つとして和文学会誌の発行は意義がある。しかし、「学会誌」がそのような目的を果すにふさわしいだろうか？むしろ、現在のサーキュラーを充実したものにすることこそが正しい措置であると考えざるをえない。

以上のような諸問題から、本委員会としては「和文学会誌」の存続についての論議を新運営委員会の議題として取上げて頂くことを希望している。現委員会は上述のような論点から廃刊の意見をもっている。しかし、廃刊が実行された場合の重大な影響についても、もちろん十分に承知しているつもりである。これは、現在の会員区分、そして必然的には会費にも影響する問題である。さらに、現在の「発生物学誌」の「実験形態学誌」以来の伝統と大きな成果を考えるなら、その廃刊は当然、学問的にも大きな決断であろう。われわれ委員会は、かつて、発生に関する学問がごく一部の関心しか集めなかった極めて特殊な分野であり、初期胚の如く小さかった時代に、多くの困難を排除してこの雑誌の発行を取って実行された諸先輩の、パイオニアとしての正しさを、この機会に改めて評価するものである。しかし、この胚は非常に大きく成熟したのである。従って、それに対応して、和文の刊行物を「学会誌」の枠にとどめておくことは、学会としてとるべき道でないとするのがわれわれの判断である。

この件は、学会活動の重要な問題であると考えられるので、運営委員会、総会で慎重に
論議されるべきであるが、会員諸氏からの御意見が事務局、運営委員、あるいは和文誌編
集委員まで寄せられることを強く希望するので、本委員会の論点を卒直に被歴した次第で
ある。

文責 岡田 節 人